沖縄の都市伝説
―Ａアイスをめぐる語りから―

須田　惠

１．はじめに

沖縄には、「Ａアイス」という地元ではよく知られたアイスクリーム業者がある。インターネット上でそのアイスクリーム業者の存在を知り、その販売形態が筆者の地元である秋田県の「ババヘラアイス」[1)]と似ていたことからＡアイスに興味を持った。

そして詳しく調べていくうちに、インターネット上でＡアイスに関するある噂を知った。それは「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂である。

この噂は、インターネット上ではただ噂だけが掲載されていて、その噂誕生のきっかけや発展経緯についての詳細は見当たらなかった。そこで、実際に現地沖縄へ行ってその噂の真相を明らかにし、なぜそのような噂が発生したのかその経緯を探ってみることにした[2)]。

２．Ａアイスとは

Ａアイスは 1975 年にアイスクリーム販売業者として営業を開始した。同年に沖縄国際海洋博覧会が開催され、そこに出展していた高知県のアイスクリーム業者からヒントを得たという。その後、その販売業者から販売権を取得して営業を開始した。

主に国道 58 号線やその他の国道沿い、もしくはバス停付近にてアイスを販売している。アイスはひとつ 150 円で、アルバイトはもっぱら 18 歳以下の女子中高生である。最近では路上でのアイスの販売だけでは経営が難しくなってきたため、パーラーを新設し、アイスの種類を増やすなどの工夫がされている（写真１：ウェブサイト「てぃんさぐぬ花」、写真２：ウェブサイト「子連れ温泉ガイド地熱愛好会」より。モザイク部分は筆者による）。

写真１　路上販売の様子

写真２　直営のアイスクリームパーラー

３．都市伝説としてのＡアイスの噂

３.１　噂の分類

噂に関する研究は、現在まで数多くなされている。なかでもエドガール・モランのオルレアンの研究なくして噂研究は語れない。そして日本では、川上善郎、佐藤達哉、山田厳子らの研究が著名である。

川上・佐藤・松田（1997）によると、一口に噂といっても大きく３つに分けられるという（図１参照）。

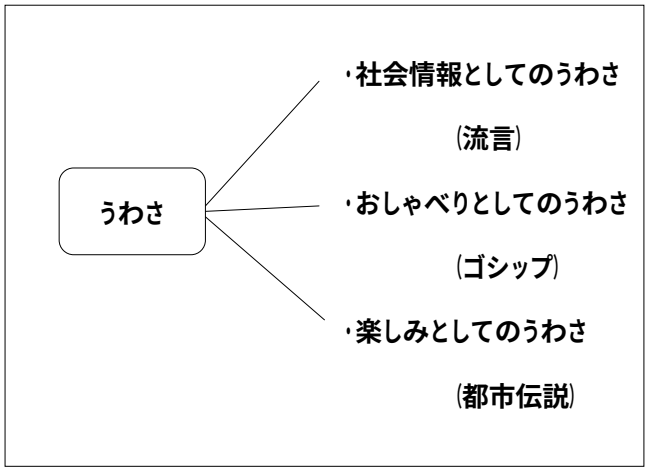

図１　噂の分類

図１のように噂は流言・ゴシップ・都市伝説の３つに大別される。今回の調査で扱ったＡアイスに関する噂は、インターネット上の掲示板の書き込みや現地で人々の日常会話のひとつとして話されていたものであり、真実かどうかはあまり問題にされていないようであった。

そういった点が、「真実かどうかはあまり問題にされず、話としてのおもしろさに重点がおかれた日常の会話の種のひとつ」という都市伝説の定義にあてはまる（川上・佐藤・松田 1997）。

よって、本稿では「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂を都市伝説と考え、その都市伝説化の経緯について考えていく。

３.２　Ａアイスの噂をめぐる＜場＞＜ことば＞＜共同体＞

山田（1997）によると、世間話や噂は、それを語る場・ことば・共同体の３つの観点に分けて分析・考察ができるとしている。以下、山田の分類に則して、Ａアイスに関する噂を分析していく。都市伝説の一種であろうこの噂は、果たして、どのように語られてきたのだろうか。

（１）噂が語られる＜場＞

調査によると、沖縄本島ではもとよりインターネット上の書き込み掲示板やその他沖縄関連サイト・個人ブログなど、沖縄県内外問わずその噂を確認することができた。

（２）噂を語る＜ことば＞

「Ａアイスはテキ屋が経営している」というこの噂には、噂を知っている者の一部であるイメージがついてまわっていることが調査を通してわかった。

それは「こわい」というイメージである。この噂を知る一部の者のなかには「こわい」というイメージや「その噂にあまり触れてはいけない・触れないほうがよい」といった思いをめぐらす者もいるようであった。なぜ、彼らはこの噂にそのようなイメージを抱くのだろうか。

あくまでも推測にとどまるが、それは「北部」ということばがもつイメージが関係してこよう。「Ａアイスはテキ屋が経営している」というこの言葉に噂が発展していくキーワードが含まれている。

「Ａアイス」は製造工場兼事務所が沖縄本島北部の今帰仁村にあり、北部を主な販売対象地域としている。このとき、現在の沖縄県の中心地を那覇市と考えると、南部の那覇市から北部の今帰仁村は地理的に遠い場所といえる。

一般的に中心地から遠いところは周辺であり、僻地であると考えられやすい。そして、そのような土地にはどことなく後進的なイメージをもつ。中心地から遠く、周辺であり僻地であると、そこには何があるのか、何が行われているのかを想像し難い。すると人は、そのようなところにある種の恐怖感を抱きやすい（赤坂 1992）。

つまり、上記のフレーズには北部がもつ「こわい」というイメージを助長し、噂の存在を支える要素が含まれているのである。

（３）噂を支える＜共同体＞

どのような噂でも、その噂を語る者（支える者）がいなくては、噂は噂としてこの世に存在し得ない。「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂は誰がその存在を支えているのだろうか。どのような共同体がその存在を支えているのだろうか。

１つには、まず沖縄住民と観光客が挙げられる。そして、もう１つにはインターネット上の沖縄関連サイトや書き込み掲示板、個人ブログなどのネット媒体を挙げることができよう。つまり、この２つの共同体が主な噂の生産者であり供給者、保有者であるといえよう。

４．噂の真相とその誕生経緯

４.１　噂の真相

「Ａアイスはテキ屋が経営している」というのは事実なのか。真相を明らかにすべく、沖縄県今帰仁村と名護市において聞き取り調査を行った。Ａアイスのアイスクリーム製造工場が今帰仁村にあり、直営のパーラーが名護市内にあることから上記の２

ヶ所を調査対象とした。

調査内容としては、まず筆者がインターネット上で見つけた噂の内容を知っているか否かを聞き、噂の内容を知っているのであればその噂の誕生のきっかけを知らないかさらに踏み込んで聞く形をとった。

調査の結果、興味深いことに沖縄本島北部に位置するそれら２つの地域ではそのような噂の存在をほとんど確認することができなかった。知っていたのはＡアイスの社長とその従業員たちや彼らの親族ばかりで、地元住民で知っている者はほとんどいなかった。

一方で、さらに興味深いことに今回の調査対象地とは正反対に位置する沖縄本島南部の那覇市内で「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂の存在を確認することができた。そして、彼らのなかには、先に述べたように「その噂にはあまり触れないほうがよい」という者がいた。

それでは、噂は事実であったのだろうか。単刀直入にいうと、噂はあくまでも噂でしかなく、まったくのでたらめであった。これは現地での聞き取り調査と実際にＡアイスのアイスクリーム製造工場へ足を運んでその代表や従業員から直接話を聞いたことでわかった。

４.２　なぜ噂は誕生したのか

噂はまったくのでたらめであったが、なぜそのような噂が生まれたのだろうか。現地での調査で明らかになったことをもとに噂誕生の経緯を考えてみたい。

現地での聞き取り調査のなかで興味深い話が２つほどあった。その１つが「立て掛けてあったある１枚の写真」の話である。その写真とは沖縄出身のある男性アーティストとその父親、そしてＡアイスの社長の３人が写っているものであった。そしてＡアイスは一時期、その写真をそばにおいてアイスの販売を行っていたそうだ。すると、その写真を見た元アルバイトの女性の友人が「Ａアイスは暴力団関係者とつながりがあるのか」、「Ａアイスでアルバイトをするのは危険ではないか」などと彼女に聞いてきたそうだ。

なぜ、彼女は元アルバイトのその女性に写真を見てそのように言ったのだろうか。それは、その写真に写っていたアーティストの父親がその筋の関係者とつながりがあるといわれていたからである。これは地元ではよく知られた話だそうで、ゆえに彼女は写真を見てそのように尋ねたのだろう。聞き取り調査の際にこの話をしてくださったその女性もそう推測していた。ちなみに、現在はアイス販売時にその写真を立て掛けてはいないそうだ。

そして２つ目の話であるが、それはＡアイスによく似たアイスクリーム販売業者が存在するという話である。その名を「Ｂ商事」といい、「Ｃアイスクリン」と称して数年前からＡアイス同様、路上でアイスを販売しているそうだ。

Ａアイスの従業員の話によると、Ａアイスが青と白の縞模様のパラソルをさしてア

イスを売っている（写真３：ウェブサイト「Blog『307 のなんくるないさ～』Jr 版」より。モザイク部分は筆者による）のに対して、Ｂ商事は赤と黄色の縞模様のパラソルをさしてアイスを売っているそうだ[3)]。

パラソルの色やアイスの味に多少違いがみられるものの、販売商品や販売形態が非常に似ている。沖縄県内で路上販売アイスをめったに口にしたことのない者ならば、ＡアイスとＢ商事を見分けることは難しいだろう。

また、聞き取り調査を通してＢ商事の従業員は身なりが少々派手なため、近づきがたくて怖いイメージがあるとの声を何度か聞いた。さらに、Ｂ商事が手がけている事業はどこかテキ屋めいたところがあるとの話も聞いた。

写真３　Ａアイスの路上販売用アイスメーカー。これに対してＢ商事のパラソルは赤と黄色の縞模様である。

今回の調査ではＢ商事への聞き取り調査は実施できなかったため、推測にとどまるが、「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂はＡアイスとＢ商事が販売しているアイスやその販売方法が酷似している点と、Ｂ商事に対する地域住民のイメージが相まって誕生したとも考えられる。

両者どちらかからアイスを買った者がＡアイスとＢ商事を勘違いし、地域住民がもつＢ商事へのイメージがそこにプラスされてこの話が都市伝説へと変化していった。調査で得た情報が一部曖昧であるため、断言はできないが可能性としては十分起こりうる話であろう。

５．まとめ・今後の展望

インターネット上で見つけた「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂は全くのでたらめであった。噂はどこで発生し、誰が広めたのかを明らかにすることはできなかったが、この噂の誕生をおもわせる話や同業者の存在を確認することができた。「Ａアイスはテキ屋が経営している」という噂は都市伝説のひとつといえ、このような噂は、噂のもととなっているものへの十分で正しい知識がなければいつまでも存在し続け、その伝達内容は伝達する者のものの見方にあった形に変化していくだろう。

このＡアイスに関する一種の都市伝説はフィールドワークという調査方法によって民俗学的に深く掘り下げることができた。しかし、今後さらに詳細な調査および考察が必要である。４.１でも述べたように、Ａアイスに関する噂は沖縄本島北部ではあまりその存在を確認できず、反対に本島南部でその噂の存在を確認できた。

よって、次回は沖縄本島南北でのこの噂の認知度に着目した調査・考察が必要であると感じる。その際は、Ａアイスに関する噂の認知度が沖縄本島南北で異なるのは、

噂が本島内を移動しているため、認知度に差が生じたとの仮説を踏まえて調査を進めていきたい。

さらに、沖縄本島南北でＡアイスの噂に対するイメージに一部違いがみられたが、これはフランスのオルレアンで広まった試着室での女性誘拐の噂で、すべてのユダヤ人が危険視されたことと相通ずるところがある（エドガール・モラン 1973）。

沖縄本島でも南部と北部それぞれで、そこの住民に対してなんらかのイメージがあるのではないだろうか。今回の調査対象となった噂も、彼らがもつイメージがその誕生とその支えのひとつになっているのではなかろうか。以上のことを踏まえて、さらなる調査・研究に努めたい。

そして最後に、今回の沖縄でのフィールドワークに協力していただいたすべての方々にここで感謝の意を表したい。

注

1) 夏に国道沿いでよくみられる路上販売型のアイスクリーム。そのネーミングは年配女性がヘラでアイスをすくって販売していることから、現地の方言であるババ（＝年配女性）とアイスクリームを組み合わせたもの。

2) 本稿で行う聞き取り調査の内容を含んだ記述・表現は、現地の人々の言説に従ったものである。

3) 現地の人の話によると、Ｂ商事が所有するアイス販売用のパラソルには青と白のウェーブ状のものもあるらしく、販売形態が非常に似ているようだ。

参考文献

赤坂憲雄（1992）『異人論序説』筑摩書房

エドガール・モラン　杉山光信訳（1973）『オルレアンのうわさ』みすず書房

「沖縄のうわさ話」ウェブサイト管理人 tommy 編（2006）『沖縄のうわさ話』ボーダーインク

川上善郎（1997）『セレクション社会心理学—16 うわさが走る—情報伝播の社会心理—』サイエンス社

川上善郎・佐藤達哉・松田美佐著（1997）『うわさの謎』日本実業出版社

佐藤健二（1997）「「はなし」と現代」『岩波講座　日本文学史　第 17 巻　口承文学 2・アイヌ文学』岩波書店

佐藤達哉編集（1999）『[現代のエスプリ]別冊　流言、うわさ、そして情報』至文堂

菅原和孝編（2006）「都市伝説への接近—彦根の腹痛石」『フィールドワークへの挑戦——＜実践＞人類学入門』世界思想社

山田厳子（1997）「世間話と聞き書きと」『岩波講座　日本文学史　第 17 巻　口承文学 2・アイヌ文学』岩波書店

参考ウェブサイト

「てぃんさぐぬ花」blog.thinsagunuhana-okinawa.com/?page=1

「子連れ温泉ガイド地熱愛好会」spa.s5.xrea.com/okinawa/715f.htm

「Blog『307 のなんくるないさ～』Jr 版」nankurujr.ti-da.net/e781274.html